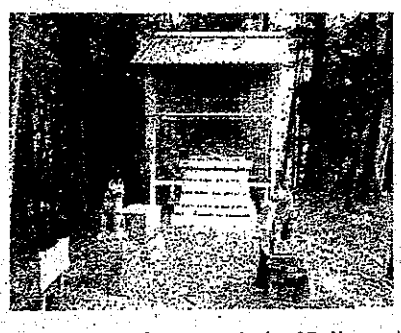
⑮ 伝説 四匹のきつね（瓜連）

（那珂市歴史民俗資料館）



▲ 瓜連：源太郎稲荷

▲ 米崎：甚二郎稲荷

▲ 笠間：紋三郎稲荷

昔から言い伝えられてきた民話や伝説には、歴史的事実云々は別にして当時の人々のさまざまな思いや憧れ、願いなどが込められています。今日では、それらの温もりのある心を少しでも現実の生活に生かしたていけたらと思います。

大昔、静（那珂市）の青木山（静神社が鎮座する森は帝青山といわれた）に源太郎、甚二郎、紋三郎、四郎介という四匹の兄弟狐がおりました。ある日、四匹の狐は相談して「仲間には人間をだましたり、困らせたりするものもいるが、私たちは力を合わせて人間に協力しようではないか」ということになりました。

一番年長の源太郎狐は言いました。「私は長男だから、本家のこの里を守らねばならない。この里に大きな川があるからこの川を守る役につく。甚二郎以下のものはそれぞれ地方に出てその地の人間の開拓に協力するように」と。その結果、甚二郎狐は野を、紋三郎狐は山を、四郎介狐は海を守ることになりました。

甚二郎狐は田畑の開墾に力を貸し、灌水や稲作などを教え神通力を発揮しました。紋三郎狐は山の木立の成長を促し、家の建築に欠かせない砂利・土石の場所を暗示しました。四郎介狐は大海の中の魚類の居場所を知らせ、河上まで魚を呼び寄せたり塩を作る方法も暗示しました。

衣食住にわたって人間の生活を大いに高めた四匹の狐は、人々の尊敬を受けるところとなりそれぞれの土地の守り神となりました。こうして、源太郎狐は瓜連城（那珂市瓜連）に、甚二郎狐は米崎城（那珂市本米崎）に、紋三郎狐は笠間城（笠間市笠間）に、四郎介狐は湊城（ひたちなか市湊中央）にとそれぞれの郷土の稲荷神社として祀られています。

▲湊：四郎介稲荷

瓜連城跡は、現在は常福寺（浄土宗）の境内となっています。その境内を土塁が囲んでいますが、その北部隅に鎮座する稲荷神社が源太郎狐を祀った祠です。ここは瓜連城の鬼門に当るところです（『瓜連の昔ばなし』）。

この伝説から、郷土づくりや協働の大切さ、自然への畏敬や恵みへの感謝などに思いをいたしてみましょう。